
私の友人はゾンビらしい

筋肉痛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の友人はゾンビらしい

【Nコード】

N1669Z

【作者名】

筋肉痛

【あらすじ】

日常を過ごす男は、ある日不思議な夢を見た。夢の中で会ったもう一人の自分。望みを叶えてくれると言うが、それが男とそのまわりを非日常へと引きずり込む。

自己解釈、独自設定、キャラ改変、などなどの要素を含みます。苦手な方はご注意ください。

プロローグ

時刻は約4時、斜光が教室内を赤く染めている。

教室には二人の生徒が向かい合って座って、話をしている。

「私は今日、おかしな夢を見たんだ」

「へえ、どんな？」

「それはな

私はいつものように暇な授業を受けていた。教師の声がとても気持ちのいい子守唄になっていたのを覚えている。

だから一眠りすることにしたのだ。

ここまではごく普通にあることだが、問題の夢の内容は普通ではなかった。

私は棺おけのような物の中で目を覚ました。いや、夢の中であつたから、目を開けたと訂正しておこう。

仰向けに寝ていたから必然的に上を見ていたのだが、そこで私を見下ろす影が見えたのだ。

私を見下ろしていたのは私だった。どこか輪郭がおぼろげで、今にも崩れてしまいそうな。

相手の私は、こう言った。

「いつまでその中にいるつもりだ」

確かに棺おけに入っているなど縁起が悪い。私は出ることにした。こんな時、身体が動かない。なんてことが起こるのが定番だが、私は簡単に出ることができた。

私は相手の私と向き合った。相手の私は、なんとも楽しそうな顔をしていたな。

「おもしろいね、君」

「む、いきなり人をおもしろいなどと言うのはいささか無礼ではないかね。とらえ方によつては、相手を傷つけるぞ」

夢の住人に向かってお前はなにを言っているのか、と思ったか？なに、気にすることはない。私自身少なからずそう思っていた。自分で行った行動なのにな。

相手の私はさらに口角を上げ、新しい玩具を手に入れた子供のように笑った。

「これは失礼。私は思ったことを口にだしてしまう癖があつてな」

この言葉に私はドキリとしたものだ。相手の私は、もしかすると私が気づいていない自分を教えてくれているのでは、と考えてしまつてな。

そこは夢の中だし、私の姿をしている。

夢は自分自身の経験を映し出している、と言われている場合もあるわけだからそうゆうこともあるだろう。

「詫びと言つてはなんだが、そうだな……一つ望みを叶えてやろうか？」

お前なら、こう言われてどう答える？

ここは夢の中だ。ここで望めば偽物ではあるが叶うだろう。
かわいい女子とお近づきになりたい、か。いかにもお前らしい答
えだな。

私はこう答えた。

「断らせてもらおう。望みは、私自身で叶えてこそ意味がある。正
確にはその望みに至るまでの道のりに、だがな」

「なんだと？私に恥をかかせるのか？」

「そのようなつもりは……」

「ならば、なにか言ってくれるだろう？」

世の中、なかなかうまくいかないものだ。

どうせ夢だ、そう思いなおして私は一つの願いもどきを言った。

「では、私を超人にしてくれないか？」

お前も小さい時、一度は考えたことがあるはずだ。

物語のような非日常を。

相手の私は満面の笑みを浮かべていた。

「クツ、聞きつけた。内容は紙に書いて、君の筆入れにでも入れて
おこし」

「ま、待て。何故ここで筆入れが出てくる。内容もここで教えてく
れなければ意味がないではないか」

「気にすることはない。後に全て分かるだろう」

そして、ここで私は目が覚めたのだ」

「以外にびっくりな内容だったな。主に、平松がそんな夢を見ることか」

「馬鹿にしているのか？相川」

ケタケタと陽気に笑う相川に対して平松は少々怒気をこめて言う。その言葉を受けると相川は笑うのをやめ、うろたえた顔になる。

「う、悪い。つい……な」

平松は更に怒気を強めて相川をにらむ。

それをつけて相川は小刻みに震える。

「そそ、そんなことより紙は入ってたのか？こんな話を聞かせてくるなんて」

平松はスクールバックから筆入れを取り出し、一枚の紙を相川に渡した。

相川は折りたたまれてりる紙を開く。中にはこう、書かれていた。

筋力	D
魔力	A
耐久	C
幸運	D
敏捷	B
宝具	???

戦闘続行 : B 瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し : A + 戦闘から離脱する能力。

対魔力 : C 小規模の魔術を無効にする。

透化 : B 精神面への干渉を無効化する精神防御。

無窮の武練 : C いついかなる状況においても体得した武の技

術は劣化しない。

騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー) : A + +
手にしたものを自身の宝具として扱う。

十二の試練(ゴッド・ハンド) : B

代替生命のストック1を有する。既知のダメージに対して耐性を持たせるため、一度殺した攻撃で再び殺されることはなくなる。魔力供給を受ける、時間の経過によりストックの回復可。

空想電脳(ザバーニヤ) : ?

触れた相手の脳を爆薬に変え、爆散させる。

???

???

???

相川は一通り読み終わると平松を見る。

「……まさかここまでなんてな」

相川は嘆きをふくむ笑顔を平松に向けた。平松は相川の言葉の意味が理解できておらず、ただ首をかしげる。

そして、その疑問を解消すべく口を開いた。

「もしかして、信じてないな？」

「そりゃそーだろ。こんなの信じるほうがどうかしてる」

平松の眉が不満そうに上がる。まさか自分の友人の信頼を獲得できていなかったのか、と。

「なら仕方が無い。実際に証明してみせよう」

持っていた筆入れから一本のシャープペンシルを取りだし、相川の前に掲げる。

ふっ、と平松が力を込めるとシャープペンシルは黒く染まり、葉脈のような黒い筋が侵食していく。

「おいおい、マジかよ……」

常識ではありえない光景を目にした相川は目を見開き、変わり果てたシャープペンシルをマジマジと眺める。

その様子はオタクと言われる人種が女子の絵を熱心に見つめる時のような、おまわず気持ち悪いと思ってしまうほど。

「変なこと考えてないか？」

「そんなことはない。どうだ？ これで信じられるか？」

「ああ。流石にここまでやられちゃな」

やられたぜー！ とふざけ気味に相川は大きな声を出した。

その行動は現物を見せられて否定することができなくないが、正直なにかの冗談であることを期待しているようだった。

期待に応えてくれる人などはこの場にはいないが。

「よもや、こんなことになるとは思ってもよらなかった。完全に予想外の事態だ」

「そんなの気にしなければいいんじゃないか？あるからって使わなきゃいけないなんてこと、ないんだから」

ふざけた雰囲気を出そうと頑張っていた相川も平松の真面目な声色を受け、思いつきだったが比較的キチンとした提案をする。

その案に平松は曖昧な反応を見せる。

「確かに、今のは使わなければどうということはないが、身体能力の突然の向上に慣れるのは時間が掛かる。その間が問題なのだ」

身体能力？とこぼす相川に平松は説明する。

「先程見せた紙に書いてあっただろう。筋力や敏捷といったものが」
「ん。だけど筋力が日常生活に関わりそうだが所詮D判定じゃないか」

「それがな、所詮Dと言うが、私は今少し力を入れて叩くだけでこの机を粉碎することができるほどの力がある」

相川の顔が青ざめていく。

背中にじつとりとした、嫌な汗がたつた。

「ヤバくないか、それ？」

「かなり、ヤバイだろうな」

相川は大きいため息をついた後、ガーーーーと叫びながら頭をワシャワシャとかく。

しばらくそれを続けており、平松は黙ってじつと見つめていた。

「しゃーない、この件は明日に持ち越した。そろそろ完全下校時間になっちまうし」

窓の外を見れば、いつの間にか真っ暗になっており、部活動の活動も終了していた。

「すまないな、私の為にこんな時間まで」
「気にすんな。とりあえず帰るか」

二人は立ち上がり帰路へ着いた。

お互いに頭の中は目の前の平松の非現実でいっぱいであり、これから更に普通とはかけ離れた事態が起ころうなどとは、思っていないかった。

まさか、殺人鬼に出くわすなどとはつゆほども。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1669z/>

私の友人はゾンビらしい

2011年12月5日23時53分発行